

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第17回 「一式飾り」の夏、日本の夏
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-09-12
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6244

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第17回

前回に続き、今回も見て

きたばかりの作品を紹介したい。写真は出雲市斐川町の直江で7月に開催された「なおえ夏祭り」の作品である。直江の万才町の皆さんが陶器一式で制作した。

作品のタイトルは「祭りの綿菓子」。祭りの屋台で綿菓子を賣つ子ども姿が見える。打ち上げ花火を眺める子どもたちもいる。夏祭りの風景を見事に切り取った作品である。

万才町は毎年、子どもが主役の祭りや遊びをテーマにしているが、私は万才町作品を見るたびに胸が熱くなる。子どもの頃の思い出がよみがえって、ノスタルジーに浸ってしまふ。そんな私の姿を見て、同行の若い学生たちは「三丁目の夕日」と笑つ。

「一式飾り」の夏、日本の夏



万才町の作品の風景と同様に、「なおえ夏祭り」は今年

もや若者であふれていた。宿場町の面影が残る直江の町を

も大勢の人でにぎわった。平日の夜にもかかわらず、道の両側には屋台がびっしりと並び、祭りを楽しむ子ども

歩きながら、まるで昭和の時代にタイムスリップしたような錯覚を覚えた。

このような昔ながらの地域の祭りが、今も続いていることが信じられない。地域の人たちが一体となって祭りを支えてきたおかげだと思つ。

その礎（いしずえ）を築いたのは、直江一式飾り保存会の会長と、なおえ夏祭り実行委員会の会長を長く務められた石原正雄さん。今から33年前に「手作りでも自主的な楽しい祭りづくり」を目ざして、なおえ夏祭り実行委員会を立ち上げ、自治会主導で行政に頼らない祭りの運営に尽力された。

石原さんは今年87歳。万才町で長年にわたり、作品を制作されてきた方でもある。戦時中の物資の乏しい時代に、貝殻で作品を作って飾ったことがあったと伺った。

6年前、初めて万才町で見た「昭和の遊び竹馬」という作品が忘れられない。陶器一式を用いて、3人の子どもが竹馬で楽しそうに遊ぶ姿を

巧みに表現していた。

石原さんは実際に地域の子どもたちと触れ合い、手作りのコマや竹トンボをとして「一式飾り」を教えることに熱心で、毎年調査に同行する学生たちにも優しく接してくださる。子どもや若者に対する温かなまなざしが、作品から伝わっている気がする。

現在、石原さんは制作されていないが、万才町では石原さんの作風が若い世代に引き継がれ、今年の「祭りの綿菓子」でも、子どもたちの楽しそうな姿が印象的だった。

このように、直江には古き良き日本の祭りの風景が残る一方で、今年は新たな光景を目にした。大勢の日系の人たちが祭りを訪れ、「一式飾り」を面白そうに眺める親子連れの姿も見られた。

たとえ言葉の壁があっても、「一式飾り」の「見立て」の面白さは分かり合える。地域の国際化が進む中、日本人も外国人も「一式飾り」を見て、共に日本の夏を堪能できれば素晴らしいと思つ。